

第1話

「わたし」を取り囲む世界

—人称の捉え方—

(1) 「わたし」探し

新津: わたしたち日本人を取り囲んでいるというか、まとわりついている英語というものの“正体”を暴きだそうというのがこの対談の狙いやそうですが、正直に言うて、どうなるんかさっぱり見当が付きません。そもそもわたしたち二人にこうした対談というか雑談をやらせようとする事自体、「つくる側」は独断と偏見に満ちたもんを期待してるんやろうけど、じつは思いつきで言うんですが、そういう思い込みや勘違いのなかにこそ、「日本人の英語」ってヤツがひそんでるのかもしれない。そこを正直に語りきれば、「日本人の英語」の“正体”というやつがあぶりだせるんやないかという予感もします。

里中: そこに期待をかけてお互い思う存分に恥をさらしていきましよう。

新津: ほな、手始めに「人称」からいきませんか。

里中: そうしましよう。異議はありません。こう見えても長幼の序を重んじるほうですから。灰色の脳細胞を刺激する口火をまづ切ってください。

新津: 英語の場合、「わたし」を語るときは、どんな場合でも、まず“I”(アイ)と言えばいいでしょ。これ、ほんまに助かる。断固たる存在感がある。それにひきかえ、日本語はあやふやで流動的、きわめて複雑な表情を見せる。面倒やね。そのときの状況や人間関係によって千変万化する。日本語を母語にしていないうちが日本語学習者が抱えている悩みは、推して知るべしやね。日本語の1人称の使われ方は、とんでもなく複雑。「わたし」「わたくし」「ぼ

く」「おれ」に始まって、「わし」「わい」…。

里中: 「わて」「うち」「おら」「おいら」、それから、えーと、「小生」「こちとら」「拙者」なんてのもあります。それから日本で一人しか使わない、ごく特殊なものとしては、「朕^{ちん}」なんてのもありましたね。

新津: 以前、こんな文章をつくって、学生に英作させたことがあるんです。「僕は彼女とおしゃべりするときは『俺』と言いますが、学校の先輩と話をするときには『わたし』と言います」。

里中: ハハハ。キツイですね、それは。日本語の音を使わずには英作できませんね。恋愛関係にある「彼女」も「学校の先輩」も、そのニュアンスを出すのはむずかしい。そのうえに、「わたし」がたくさんいる(笑)。

新津: 立場や状況によってね、「役割」という言い方をしてもええと思うけど、自分の役割がいとも簡単にコロコロ変わりよる。

里中: まさに「君がいる、ゆえに我あり」って感じですね。自分は他人によって発見され、規定される。

新津: ヨーロッパ語の場合は、1人称は1つというのが原則やから、日本語学習者は戸惑うやろね。

里中: でも、人称代名詞はその豊富さとは逆に、実際に使われるものは、多くて3つ4つでしょ。私の場合、「わたし」「おれ」、たまに「ぼく」を使う程度ですね。で、日本語学習者が頭を抱えて悩んでいるのは、関係におけるやりとりなんです。自分のこと

を「ゆっちゃんは…」とか「お父さんはね…」という人間がいる(笑)。日本語の小説を読んでいて、まず彼らがやることは発話者の発見。これがもうやっかい。「誰が発言しているのかわからないことがよくある」って彼らは言う。まさに暗号解読に近い作業なんです。英語学習者には、この悩みはありませんね。誰の発言か、悩むことなんてない。

新津: まあ、おおむね、そやろね。

里中: 親族関係のやりとりについて少し言いますと、これは2人称の呼びかけ方についての問題にもなるんですけど、たとえば、娘が母親に「お母さん、それ取って」と言っても、母親が娘に「娘、それ取って」とは言えない。わかりやすく、地位という言葉を使いますが、地位の上の者は下の者に、「娘よ、息子よ」とか「妹よ、弟よ」といった呼びかけができない。

新津: 結婚披露宴なんかでは、よう聞くけどなあ。

里中: それは、歌の題名です。

新津: 冗談やて。まあ、たしかに親族関係においては、下の地位の者を呼ぶ場合は、名前を呼ぶか、「おまえ」「あんた」なんていう代名詞を使うか、そのいずれかやね。ボクなんかも「ノブハル、あんた、いつまでフラフラしてんの」とか、いまでも母親によく言われるし…。このことは、職場においても同じことが言える。「先生」と呼びかけられることはあっても、面とむかって「生徒、これ、わかるか」なんて言うことはない。「課長、いつ戻られたのですか」とは言っても、「部下、いつ戻ったのだ」とは言えへんしね。

里中: そうですね。

新津: それから、あれも不思議やねえ、「ねえ彼女、お茶しない？」っていうやつ。あれ、2人称に対して使うてるやろ。

里中: 静岡では「ねえ彼女、お茶摘まない」って言う。

新津: 彼女と一緒に茶摘みへ行ってもどないすんねん(笑)。

里中: それから、もっとすごいのがあります。「うちのが…」とか「うちの者が…」と男が言えば、それは女房ことになるし、「うちの人が…」と言えばそれは夫を指している。

新津: あらためて、そう指摘されたら、なんていうか、こんがらがって、頭でよう整理できんようになってきた。

里中: 複雑。

新津: 複雑…。いやいや、もっと複雑なんがある。大阪なんかやと、お好み焼き屋のおばちゃんが、客にむかって「自分、マヨネーズいる？」って言う。言われたほうは、「自分、いらん」なんて言いかえす。2人称も1人称も「自分」で済ませてる。つまり、1人称が2人称になり、2人称が1人称になる。中島らも(エッセイスト)なんかに言わせたら、これは、仏教思想の根源を成す、自他一体の原理を見事に包含した表現ということになる。

里中: そうだったのですか(笑)。

新津: そうやったんですよ(笑)。

里中: 話をつづけますが、「おのれ」なんていう表現もそうでしょうね。「おのれは、なめとんのか」みたいに2人称を指すこともあれば、「おのれを捨ててがんばる」のように1人称で使うこともある。「てめえ」なんかもそう。「てめえ、何しやがる」と言えば2人称、「てめえでまずやってみます」と言えば1人称。

新津: 音声においては1人称と2人称の区別がついとらへんのやね。そのうえ、「そちらさん」とか「あちらさん」、「こちらさん」とか「お宅さん」みたいに、場所をあらわす言葉なんかも使う。

里中: 「あちらさんからこちらさんへビールをお出しするようになって…」とウェイターなんかが言う…。

新津: そう。そういうアクロバチックなこともやりよる。呼び名称にくわえて、地位称、立場称、それから所在称…。

里中: ちょっと…。

新津: 「ちょっと称」なんてのものもある。…あ、すみません。

里中: そうですねえ。Miss here! か Mr. there! なんて呼びかけませんものねえ。軽い挨拶で、Hi, there! はよく使われますが、この there には日本語のような「そちらさん」という意味はありません。その点、日本語の方は、変幻自在、トカチェフ級の技を見せる。

新津: 1人称だけやない。2人称もやっかい。

里中: 2人称もやっかいですね。「あなた」「あんた」「きみ」「おま

え」「きさま」「おのれ」「テメエ」「汝」と、すぐに口をついて出るものでもこれだけある。それに「奥様」だの「旦那」だの「お客さま」だのといった地位名称が加わる。いちばん無難に思われる「あなた」にしても、目上の人にはふつう使わない。無礼になるしね。新入社員が課長や部長にむかって「あなた」と言うと、むしろ蔑称という感じがする。日本語を外国語として学んでいる人たちは、こういったところでじつに苦労している。そういったことに悩まなくてもいいわたしたち英語学習者は、なんてラクなんでしょう。最初に私はこのことを教室で徹底的に強調して聞かせるんです、ハイ。

新津: へえー。そないな話してたら、「先生の言ってることはわかります」とアクビをしながら生徒は認めるでしょ。最近では「信の世界に偽詐多く、疑の世界に真理多し」(福沢諭吉) と思っている生徒が多いから。正論(セイロン)は紅茶だけにしてくれって言われへん?

里中: ウッ。嫌なひと。「無知を治そうと思うなら、無知を告白しなくてはなりません」というモンテニューの言葉を私は実践しているつもりなんですけど…。

新津: 話はちょっとそれるけど、日本語を習ってる人がいちばん頭を悩ませているのは何やと思う? 物の数え方。これ、ほとんどの連中が言いよる。いっぽん、にほん、さんぽん、よんほん、ごほん、ろっぽん…と、「ほん」と「ぼん」と「ぼん」が目茶苦茶に入り乱れる(笑)。

里中: そのうえ、「3本」「3つ」「3個」「3冊」など、単位をあらわす言葉も無茶苦茶多いし、ほんとたいへんでしょうね。

(2) 心理的には“i”である

新津: ところで、ボクはさっき、英語のIは、断固たる感じがすると言うたけど、それについてもう少し補足すると、その断固たる感じというのは、発話者の自己主張めいた断固たる態度やなくて、「わたし」をあらわす語が他の言葉に代用されない、という程度の安定感があるという意味で考えてもらいたいんや。

里中: で、そのココロは？

新津: 英米人は個人主義的発想、日本人は集団志向的発想みたいなことを言う人たちがおるやろ。英語のIは個人主義のシンボル、主語を立てて話さへん日本語は「和」の象徴みたいに捉える発想。ホンマにそうかなあ、とまえまえから思うてんです。

里中: 文化人類学がお得意の二項対立的な世界観ですね。比較文化っていうと、すぐにキャッチフレーズみたいなものをつくりたがる。いわく、「個人主義」対「集団主義」、「明晰志向」対「曖昧志向」みたいだね。異文化を見るときは、互いを単純化して見ようとするのはわかるけど、ああでもしないと本が売れないのかなあ。すくった指先から、こぼれ落ちるものがじつに多いことか。で、Iの話なんですけど、私も同感ですね。Iは、自分を強調しているわけではないんですよ。符号にすぎない。It's still raining. (まだ雨が降っている) のItと同様にね。彼らの意識のなかには、強い自己の主張なんていう発想はないと思いますね。

新津: たとえばね、「ここ、どこ？」って言うときに、基本的にはWhere is here? なんて言われへんもんやから、彼らは、Where am I now? とか、Where are we now? っていう。仕方な

くIを使うてる。発音するときも、Iにストレス(強勢)はおかれへん。Iに強い存在感なんかあらへん。何人かのアメリカ人に聞いたけれど、いま里中さんが指摘したようなことを言うてます。自己をきわだたせて「わたしはね」と言う場合は、Iにストレスをおいて大きな声で言うか、書き言葉やったら、As for me とか In my view / In my opinion とか In my case を使って言うてる。Iは多くの場合、仕方なく使っているにすぎないんや。

里中: ただだんに、便宜上の問題なんですよ。小文字のiが、他のスペリングと混同されないようにという、いわば正字法の習慣(orthographical habit)にしたがっただけ。無色の言葉なんです。

新津: そうやね。

里中: 視覚的に捉えやすいという、その意味で採用されたんですから。心理的には、大文字のIではなく、小文字のiに近い。

新津: ものの本によると、17世紀くらいまでは、小文字のi、それからJとかYなんかも使われてたらしい。やはり視覚的要素が決め手になってIに落ち着いたみたい。そやから、Iだけを捉えて、彼らは個人主義や、みたいな言い方はおおいに不満やね。そんなこと言うんやったら、逆に、「わたし」をあらわす言い方がたくさんある日本語のほうが、むしろ個人主義的な発想に立ってるんやないか。そない思う。

里中: なるほど。

新津: しかし、問題なのは、当のアメリカ人やイギリス人が、あなたたちは個人主義が徹底してますね、なんてあんまり日本人

から言われるもんやから、勝手に作りあげられた幻想に見合った言動を演じようとしているということなんです。そういった態度が彼らに見えるんです。そやから、都合が悪いときにこっちが曖昧な返事をする、日本人は自分を主張しない民族である、みたいな発言をしてきよる。まあ、それがまた日本人を自虐的に喜ばせることにもなるんやけどね。この件に関しては、味方がどんどん少なくなってるという感じがする。

里中:「勇者は一人立つとき最も強し」(The bravest of the brave stands alone.) っていうじゃありませんか。ハマコー (浜田幸一) という元政治家の座右の銘でもあるらしいんですが。

新津: 右翼の集会にひとりで『赤旗』を売りに行くみたいな感じがしてきた(笑)。

里中: おっしゃるとおり、主語を隠したものの言いは、言語的特徴にとどまるべきであって、日本人の文化的、民族的特質とは別問題であるように感じますね。それが謙譲の美德ウンヌンとかいう美意識の問題にまで立ち入って論及されると、本を放り投げだしたくなる。もっと慎重に論理を組み立てないと、こっちが納得できない。論理には前提が必要なわけで、前提がおかれてはじめて推論がなされ、結論が導かれるわけですよ。その前提となるべき材料に問題があれば、お話にならない。

新津: たしかに。

里中: たとえば、朝鮮語なんかも日本語と同様、主語を隠した言い方をしますが、あちらさんはじつに堂々と論争するでしょ。これをどう説明してくれるのか、と聞きたい。『ソウルの練

習問題』を書いた関川夏央さん(作家)に聞いたことなんですけど、彼らの“舌戦”のうまさはじつに見事で、圧倒されるって言うてましたね。同じ主語を隠したものの言いをする彼らも、自己主張をしない「和」を尊ぶような文化を背負っているのかと。血中ラテン濃度がすこぶる高いと思われる彼らと日本人が同じ気質だとは私にはとうてい思えない。

新津: 朝鮮語は2人称も曖昧なんですよ。どっかで読んだ記憶がある。

里中: ええ。これも受け売りなんですけど、関川さんによると、日本語の「あなた」に相当する語がないって言うてますね。「タンシン」(당신) っていう言葉があるのですが、「上」の者が「下」の者へ呼びかけるときに使ったり、男が恋人に語りかけるときにしか使わないみたいなんです。「おまえに惚れた」の「おまえ」みたいな感じで使う。あるいは、ケンカを始めるときとか、その最中に相手を呼ぶときなんかに使おうそうです。

新津: なにかたくましい言葉やねえ。

③ 「わたしたち」のyou

里中: さて、日本語の場合、親密さや疎遠さ、年齢差や男女の区別、社会的地位や職業的立場、借金の有無や、その日の虫の居どころによって、単数の1人称、2人称は変化するというを確認してきたわけですが(笑)、このへんで、複数の「わたしたち」「あなたたち」にあたる英語表現に話を移しませんか。

新津: we と you やねえ。やっかいな問題やねえ。we について

は、おもしろいがあるんです。センター試験(正式には「大学入試センター試験」)の問題で、医者と患者のやりとりがあったんですがね。はい、コピー。空所に入る適切な文を選ぶ問題です。

A: Well, doctor, what's wrong with me?

B: I'm not sure. We need to take some more tests.

A: ()

B: I don't think it's very serious, but we should be certain.

- ① Do you think I should exercise again?
- ② I don't need to sit for the exam, do I?
- ③ Is it really so bad?
- ④ Why don't you take the rest?

〈答え③〉

問題は選択肢やなくて、この対話のなかの上から2行目です。医者が患者にむかって、We need to take some more tests. って言ってますね。そうしたら、それはおかしいんとちゃうかという抗議があったというんです。「検査を受ける」のは「あなた」やから、You にすべきやと。

里中: 「親ごころの we」がわかっていなかったわけだ。医者が「どうですか、きょうのご気分は?」と言うときに、How are we feeling today? とか And how are we today? なんて言いますものねえ。元気づけたり、なぐさめたり、からかい半分で皮肉ったりするときに使う we ね。これがわからなかった。

新津: ボクも最初そう考えたんやけど、それがちょっと違うんや。知り合いのネイティブ・スピーカーに聞いたら、この take some

more tests は「もう少しデータをとってみる」「検査結果を得る」、つまり「検査を受ける」ではなくて、「検査をする」ということらしい。do some more tests と書き換えることができるらしい。

里中: じゃ、その場合の We は...

新津: 「わたし」(=医者)と「医療スタッフ」になる。「わたし」と「あなた」(患者)ではない。

里中: へえー。

新津: つまり、You を使って書いたら、You need to have some more tests. とか、You need to have some more tests done. となるわけね。「おたくには男性化粧品ありますか」「うちでは扱ってないですよ」と言うとき、“Do you have any cosmetics for men?” “I'm sorry, but we don't carry those here.” って言うでしよ。あの we と同じように考えたらいいんです。

里中: ふーん。むろん、動詞との絡みもあるんでしょうが、we って、クセ者だなあ。ここで基本的なことを確認しておきたいのですが、we は、明らかに対立概念としての they を意識しているときに用います。日本の英語学習者の多くは「わたしたち」というと頭の中では、we はどこかで they、つまり、わたしたちでない他の人たちが無意識のうちに対置されているようです。we は特定の「わたしたち」なんですね。人々全体を指す we もあるのですが、頭の片隅ではやはり they が想起されています。くわえて、他人を自分の仲間のように巻き込んだかたちで使う。

新津: そうなんや。論文なんか書く場合でも、I の代わりによく

weを使うでしょ。他人を巻き込んだかたちで書きよる。知らないところで勝手なまねをしよる。目が離せへんわけです。さっき里中さんが言った「親ごろのwe」ね、あれなんかもそう。なんか、生意気や。素直に「親ごろ」だと受けとれんね、ボクは。お年寄りなんかを使うことが多いみたいなんやけど、自分の娘みたいな年頃の看護婦に Let's take our temperature. (お熱、計りましょうね) みたいな言い方されたら、トホホ、情けない、って感じになる。

里中：そう。本の著者なども、As we mentioned in the second chapter ... (第2章でふれたように) なんて書く。weって、どこかエラそうな感じがしますね。それでいて、へりくだっている感じもある。よく王様が「余は感謝するぞよ」みたいな感じで、We thank you. っていうでしょ。国民を代表したつもりになって言う、あの「君主のwe」ね。「親ごろのwe」といい「君主のwe」といい、weって、どこか心理的に自分を高みに置いているところがある。もともとweは、「われわれ」を代表して、この「わたし」が発言させていただきます、みたいに感じる。

新津：「余」といえば、読んで字のごとく「余りもの」でしょ。「余りもの」の自分が「わたしたち」を代表するという仕掛けやね。中学生のときに習う、「ここは雪がずいぶん降りましてね」の We have a lot of snow here. も同じことです。ここでも「わたし」が「わたしたち」の代表者になって発言している。

里中：学生の頃、「我々はっ...」っていう、あの一語一語吐き切っている演説を聞いて、「我々」っていう言葉がもつ脅迫性を強く感じたことがある。

新津：と、同時に疎外感もね。

里中：ええ。そこで、「へりくだって胸をはるwe」ってのはどうですか。

新津：エエねえ、それ。気に入ったワ。

(4) かみしも ぬくもりのyouと祚のone

里中：we にロゴスの決着をつけたところで(笑)、そろそろyouに移りますか。

新津：youは、ときに「わたし」やったり「わたしたち」やったりするんです。

里中：調子ができましたね(笑)。どうぞ。

新津：『恋に落ちて』(*Falling in Love*)という映画のなかで、メリル・ストリープが演じるころのモリーがね、デートに着ていく服を決めかねて、イライラする場面があるんです。そこで自分に向かって、Molly, what are you doing? (モリー、あなた何してるの?) と言うんです。独り言や自分をとがめるときのyou。これがまずひとつ。それから、いまでもネイティブ・スピーカーに「ここはweではなく、youがいい」と指摘されることがあるんやけど、話し手を含めて「人はだれでも皆」という解釈であつたら使えと言われるyouね。You never know. (先のことは誰にもわからないよ) とか、You never can tell. (そんなことはわからないよ) のyou。このyouは、あなたに話しかけているんだ、という親しきさを出すためにもっと頻繁に使えと言われますね。この2つの

you は、「わたし」「わたしたち」なんです。

里中：万人にあてはまる一般論を言いたければ you を、一般論があてはまらない集団が頭のどこかに意識されていれば we を使えということですね。

新津：そうです。

里中：you が「わたし」や「わたしたち」の意味をもつときは、「自分」や「相手」に感情移入しているというか、一体感があるというか、we と違った、ヨコの親しみを感じますね。人肌の持つぬくもりがある。まあ、ぬくもりだけでなく、冷たさを感じることもむろんありますが...

新津：使いすぎると、なんか説教がましい感じを相手にあたえてしまうやね。多用すると、一緒にせんでくれ、と言われかねない。

里中：いずれにしても、you は、「相手」をほかならぬ「自分」にしてみたり、「相手」を自分と同じ目の高さにおいて考えたりするのに都合がいいんですね。自分の経験を語りながら、「～ですよね」とか「～なんだよ」と一般化していくという感じがします。You never know what might happen to you. (一寸先は闇なんだよ) なんかがいい例ですね。

新津：そう。一体感がある。他人の身になって考えてますという感覚。それがある。鏡に映った自分にむかって話しかけるくらいやから。幽体離脱して、相手のなかに入りこむ感覚と言うたら、言いすぎかなあ。まあ、いずれにしても、you は、we のように

タテの感覚ではなく、ヨコの感覚、連帯意識をもっている。そして、その you に^{かみしも}衿をつけたのが one なんやね。

里中：you に衿をつけたら one になるっていうのはいいですね。one はどことなくかしまった感じがする「わたしたち」ですね。「^{みども}身共」っていう感じに近くなるような気がする。タキシードにシルクハットをかぶって^{ひげ}髭をはやしている風情がある。でも、まあ、日常会話なんかじゃ、まず使わないでしょ？

新津：めったに使わない。

里中：堅苦しい、いかめしい文章の中でしかお目にかからない。

新津：うん。で、どういうときに使うかという、たとえば、犯罪か何か悪いことをやった「彼」がいるとしましょう。そして、その「彼」を弁護したい「わたし」が、One'd like to think he didn't know what he was doing. (彼はつい魔がさしたのだ、と思いたいのです) みたいに言うんです。これ、弁護士の発言やと思うてください。彼は、one を I の代用として使うんです。「わたし」に客観性を与えて、そんなふうにする。I think he did know what he was doing. (彼は自分のやっていることがちゃんとわかっていたんです) とは弁護士という立場上、^{おもて}表だつては言えない。仮定するようなかたちをとって one を用いたりする。one は、おおぜいのなかの 1 人、もっと言えば、I に距離をおいて、事態を客観的に眺めているような感じを与えることができる。かけがえのない自分の気持ちを one に託して、客観的な「わたし」を醸しだすんです。へりくだっているようで、氣どっている。その意味で、we に似た雰囲気ももっているが、やはり衿はつけ忘れない。

里中：One hopes that the situation will improve. (事態がよくなることを望んでいる) などの one は明らかに I の代わりですものね。タテ軸の we とヨコ軸の you という2つのベクトルが「わたし」の意味で交差する、その点に one が袴をつけて立っている、そんな感じかなあ。いずれにしても、ヘンに文法用語を振りまわさないで、いまのように説明してもらったほうが、ずっとわかりやすいですね。

新津：時間がきたようなので。じゃ、また。

第2話

誤解表現

—日本人の勘違い—